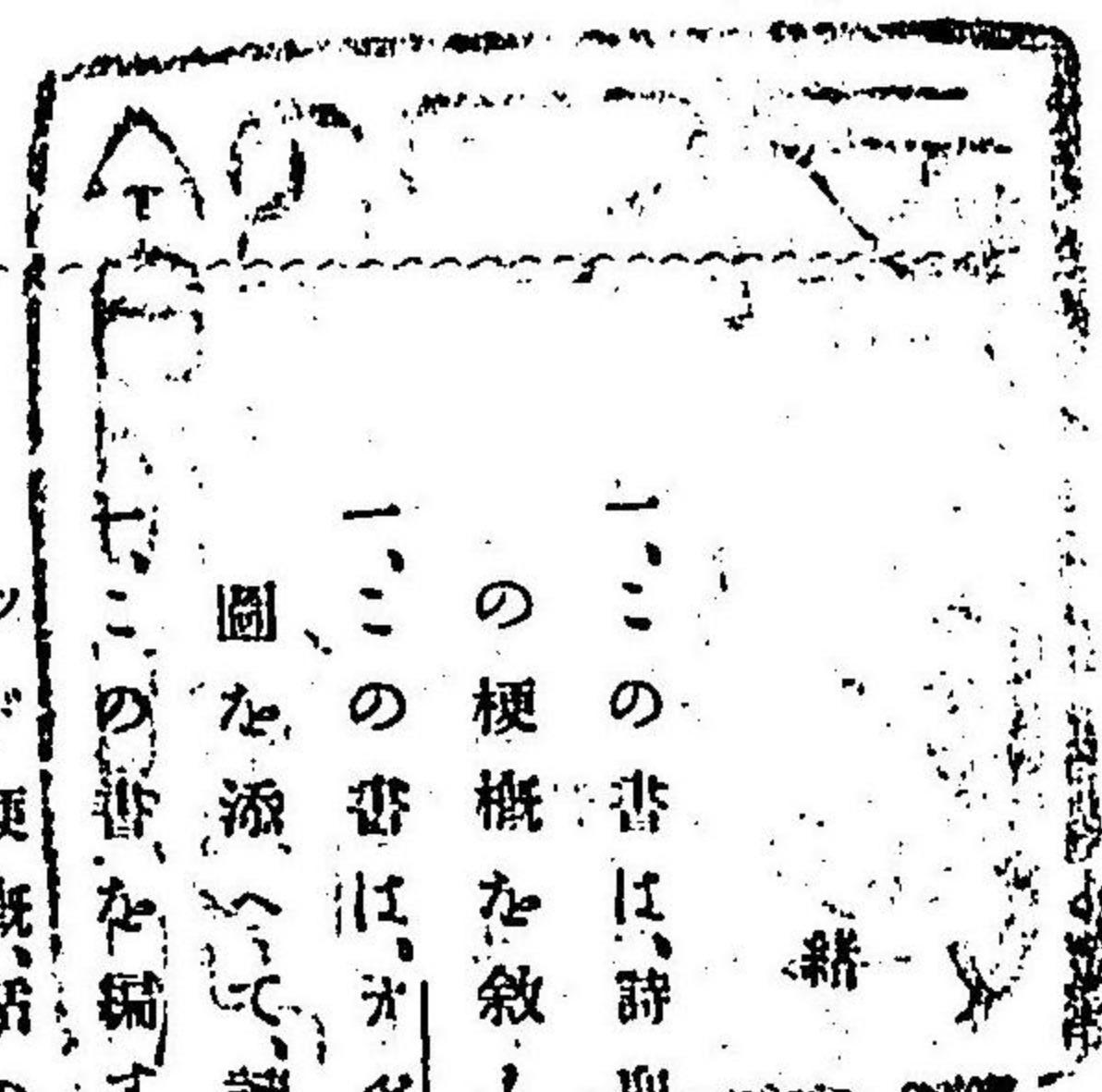


97-142



精言

一、この書は、詩學ホメロスの作といふ傳奇的敘事詩オゲッセルの梗概を敘したるものなり。

一、この書は、オゲッセルに關する主なる神話を註記し、卷末に、系圖を添へて、讀者の參考に資したり。

一、この書を編するに當りて、材料を得たる書籍は、一に、「イリアッド梗概、楯の響」に同じ。

一、編者等は、こゝに、特に、法學士日比野寛氏、米國文學士 Rev. I. W. Cate 氏、日箇原繁氏、藤浪剛一氏の諸氏を列記して、編者等に與へられたる、多大なる助力を感謝す。

一、この書を読む人々は、左の書籍を参照するを便なりとす。
希臘羅馬神話梗概 天馬

明治
37 1 8
内交

同

胡蝶の處女

イリアッド梗概

楯の響

右の三書は、皆この書と編者をひとしくす。甲、乙は岡崎屋書店の發行にかゝり、丙は金港堂の發售にかゝる。

明治三十五年八月十日

名古屋に於て、

赤司繁太郎

石田元季

漂 泊

目次

(一) はしがき	一
——ホメロスに就きて——オヂッセの譯本——	
(二) 前記	四四
——トロイ戦争に於るツリセス——イリアッドに就きて——	
——トロイの陥落——	
(三) オヂッセ	八
——チコニア人——食進族——	
——巨人國——	一一

エオルス島——風ぶくる……………	二一
レストリゴニア人との冒険……………	二四
エエアン島——チルケの妖術……………	二六
シレンスの島——龍女の吟……………	三三
シルラ、カリプサスの二怪……………	三七
トynaクリア島——破船……………	四二
カリブソ——女神の戀——再度の破船……………	四六
フエアチア——ミネルワの神助——歸航……………	五三
歸郷——父子の再會——復讐……………	七八
(四) オヂッセに關する文學……………	一〇〇
(五) 系圖……………	一〇三

オヂッセ
梗概

さすらひ

(一) はしがき

——ホメロスに就きて——

赤司 囁花 同編
石田 春風

荷も、東西の文學を談せむ程の儕、誰れかは、詩聖ホメロスを知らざらむ、ホメロスを知らむほどの徒、誰れかは、イリアッドとオヂッセとを記せざらむ。

吾人、曩に、イリアッドの梗概を叙し、名けて、『楯の響』といひ、

之を世に公にしぬ、今、こゝに説かむとするは、他の傳奇的敘事
詩オヂッセの梗概なり。

そもそも詩聖ホメロスは、その名、古今を蔽ふと雖も、出所、經歷、
極めて詳ならず、甚しきに至りては、或は、その現存せしかをさ
へ疑ふものなきに非ず。

さはれ、傳ふる所に據れば、彼の生存は遠く三千年の昔にあり
て、メレス河畔の孤女の兒、かつて、希臘各地に漫遊し、イリアッ
ドの詩材を蒐め、歸り來つて、意を家郷に得ず、流離落魄、以太利
に行き、西班牙を訪ひ、埃及を歴、飄遊數年、年老ゆるに及び、竟に
明を失し、イリアッドを歌ひて、アテンス、小亞細亞あたりを遍

歴しぬと

ホメロスの作といふもの、イリアッド、オヂッセの二大詩を除
きて、なほ、聖詩約三十篇、諷詩、短詩若干あり、而して、このオヂッ
セは、もとより、イリアッドと名を齊しうして、嘖々、人口に膾炙
せるもの也。

翻譯には、モリス、パーマー、チャプマン、ブライアント、ポーアの
などあり。

(9) Icarus.
(10) Penelope.

(7) Menelaus.
(8) Paris

(6) Helen.

(4) Troy.
(5) Ithaca.

(1) Odyssey.
(2) Ulysses.
(3) Οδυσσεύς



をスパルタ王⁽⁷⁾メネラウスに嫁せしめしが、會、トロイ王子⁽⁸⁾パリ

ス、メネラウスの王庭
に客となり、既にして
ヘレンを拉して逃る
るに及び、一雙の蛾眉
遂にトロイの戦ひを
起しぬ。
ウリセス、壘に、イカリ
ウスの女⁽¹⁰⁾ペネロペを
娶り、琴瑟相和し、偕老

(二) 前記

——トロイ戦争に於るウリセス——イリアッドに就きて——

——トロイの陥落——

オヂッセ⁽¹⁾の傳奇的敘事詩は、ウリセス⁽²⁾が(ウリセス希臘名にて、
オヂッソニスといふ)⁽³⁾トロイ⁽⁴⁾より、そのイタカ⁽⁵⁾王國に歸るに至
る十年間の漂泊⁽⁶⁾を記述したるものなり。
吾人は、まづ、ウリセスの漂泊を叙するに先ち、少しく、ウリセス
に就きて、語る所あらむか。
ウリセスはイタカの王にして、初め、佳人⁽⁶⁾ヘレンに勸めて、彼女

(11) Palamedes.

(12) Achilles.

(13) Agamemnon.

(14) Hector.

の契り濃かなりしが、こゝに、メネラウス、トロイと釁を生じ、問罪の師を發せむとせし時、ウリセスも行に加はるべかりしも、家を懷うてまた遠征を欲せず、伴り狂して、イタカの故國に籠りしを⁽¹¹⁾バラメデスに觀破せられ、止む事を得ず、勇武絶倫のアヒレスを起たしめ、共に、その師に加はりぬ。

ウリセス、敏捷機警、また、希臘軍中の雄鎮たり、かくて、トロイの戦ひ、久しきに瀰り、その第九年、アヒレス、希軍の大將⁽¹³⁾アガメムノンと隙を生じ、一時、希軍の危ふき事ありき、彼のイリアッドは、筆をこゝに着け初め、篇を重ねる二十有四、パリスの同母兄⁽¹⁴⁾ヘクトルの死に終る、それより、アヒレス、女色の爲めに身を亡

(15) Ajax

し、が、アヒレスの甲冑は、素より、天神の作にかゝり、堅牢華麗、無比なりしを、ウリセス、アヤックスの兩雄、之を争ひ、遂にウリセスの有に歸せしかば、アヤックス自殺しぬ。

後ち、ウリセスの旨に従ひ、希軍、木馬の詭計を發して、トロイを陥れ、凱歌を奏して、將士、おのおの、本國に還りぬ。

ウリセスもまた軍艦に乗じて、トロイの海岸を離れぬ。(金港堂發兌イリアッド梗概) 榎、及、岡崎屋發兌、希臘羅馬神話梗概、天馬は必ず参照すべし。

(1) Ciconians.

(2) Ismarus.

(三) オヂッセ

—チコニア人—食進族—

トロイの海岸を出帆したるウリセスが諸艦は、初めに、チコニア人の市、イスマルスに着しぬ。こゝにてチコニア人と小闘をなし、艦中、六人を失ひしが、また、艦を發して、海上暴風に遭ひ、九日の間、嵐のまにまに漂泊ひて、やうやう、食進族の國に漂著しぬ。

ウリセスは、その住民の狀況を偵察せしめむが爲めに、三人を遣す、彼等、上陸して、住民の間に至るや、大にその歡迎する所と

なり、食用の蓮を饗せられぬ。

この食用の蓮といふは、總て、之を用ゐるものは、その家郷を忘れ、故人を忘れ、長く、この國に止らむことを欲するに至るといふ。

こゝに於てか、ウリセスは、再び、彼の六人を本艦に歸らしめむとすれども、應ぜず、止むを得ずして、全軍を舉り、遂に、艦中に彼等を縛して、初めて、彼等の意を枉げぬとぞ。

テニソン、曾て、「Lotus-eaters」詩中に、蓮を食ふ人の、恍惚たる絶妙の感情を歌ひぬ。

How sweet it were, hearing the downward stream

(1) Cyclopes.

With half-shut eyes ever to seem
Falling asleep in a half-dream !
To dream and dream, like yonder amber light
Which will not leave the myrsh-bush on the height ;
To hear each other's whispered speech ;
Eating the Lotus, day by day,
To watch the crisping ripples on the beach,
And tender curving lines of creamy spray :
To lend our hearts and spirit wholly
To the influence of mild-minded melancholy ;

To muse and brood and live again in memory,
With those old faces of our infancy
Heaped over with a mound of grass,
Two handfuls of white dust, shut in an urn of brass. ”

— 巨人國 —

ウリセスの船、食蓮族の國を離れ、次に、シクロペス人の國に着
きぬ、シクロペス人とは巨人の謂なり。
彼等は、特に一島を占め、此處に往し、洞穴に居り、野生物を食ひ、
その家畜の産する所を飲食し、牧羊を爲す、而して、彼等は、前額

の中央に位する、唯、一眼を有するのみ、シクロペスは圓眼の義に外ならず。

ウリセスは、本艦隊に命じて、錨を降さしめ、糧食發見の目的を以て、その一艦を率ゐ、シクロペス島に上陸し、僚友數輩と共に、島民への贈り物とすべき葡萄酒一壺を携へ、かくて、奥深く、尋ね行きぬ。

さる程に、彼等は、大なる洞穴を見出でつ、たまたま、番人の在らざるに乗じて、その中に、何物あるかを捜さむとて、洞口より立ち入りつゝ、さて、あたりを見れば、羊の群あり、多量の乾酪あり、乳の滿ちたる桶あり、大盃あり、小羊と小山羊ヤギとは、おのおの、列

を正して養はれをり。

ウリセスの一行、かく、一覽する程もなく、この洞穴の主、ポリフェムスポリフエムス歸り來りぬ。

ポリフェムスは、大なる薪の一束を、洞口に投げおろし、乳搾らむとて、洞内に、羊と山羊との群を追ひ込み、自ら洞に入りて、二十の牡牛もなほ動す事能はざる巨巖を洞口に轉ばし、かくて、座を占め、羊乳を搾り、一部は乾酪の料にとて貯へ置き、一部は平常の飲料にとて、傍に置きぬ。

この時、はじめて、ポリフェムスは、その巨眼を轉じて、ウリセスの一行を認め、呻つて之を誰何しぬ。

ウリセス、愕然として驚きしが、言葉正しく謙遜して、われ等は、これ、トロイ遠征の名譽ある戦勝をなし、希臘人にして、今、その歸り路なるよしを答へぬ、ポリフェムス、暫しは嘿然たりしが、突如として、その巨腕を伸べ、希臘人二人を執へ、洞穴の傍に墜ちてその腦を碎き、快げに之を味ひ、後ち、床に横りて眠りぬ。ウリセスは、巨人の傍若無人なる振舞を見て、怒り、心頭より發し、今、彼れの眠れるこそ好き機會なれ、いで、之を刺し殺さむと、劍の欄かざりに手をかけしが、待てしばし、思ひ返せば、洞口は巨巖もて閉ざされたり、假令、この巨人を殺すとも、いかでか生を全うする事を得べき、幽囚の身となつて、かゝる孤島の巖穴に滅び

むより、如かず、好機を待たむにはと、胸をさすりて夜を明しぬ。翌朝、巨人は眠りさめて、またもや、二人の希臘人を執へ、昨日と同じく、うち殺しつゝ、骨をも餘さず、食ひ盡し、後ち、洞口の巨巖を動し、その羊群を追ひ出だし、再び巖を置きて去りぬ。かくて、巨人が出て去りたるを見て、ウリセスはその友を呼び、如何にして、殺害せられし友の讐を報い、かつ、此處より脱出せむかを議はかり、彼は、友をして、洞中に發見せる木の杖、これはこれシクロペが伐り來れる彼れの巨大なる杖なるが、これを削りて、その端を鋭く尖らしめ、火にて燃すべき準備を整へ、草むら深う隠し置きぬ。さて、彼れが率ゐ來れるもの、中、最も勇敢な

る四人を選び、ウリセス自らと共に、機に乗じて、彼を襲はむとなり。
夕に至りて、巨人、歸り來り、また二人を執へ、腦を碎きて夕餐となしぬ。

その食事終るや、ウリセスは、盃に葡萄酒を盛り進み出でて、彼に捧げて曰く、

『シクロペよ、これは酒なり、人の肉食ひたらば、これを

飲みぬ。』

と、巨人、乃ち受けて、之を飲めば、その味、甚だ美にして、また、他の一杯を需めぬ、一杯、また一杯、杯を重ねるに従ひ、心、陶然として、

恍惚の境にさまよひ、快き事、比べむに物なければ、大に喜びて、たゞ、之をだに、われに捧げば、他は盡く許すべしと、ウリセスに約するに至りぬ。巨人は、こゝに、ウリセスに向ひて、その名を尋ぬ、ウリセスは、

『わが名は、ノーマンなり。』

と答へぬ。ノーマンは、もとより、人に非ずの義なり。

食事既に、終り、巨人は、則ち、寢につきしが、直に熟睡して、屍骸、まさに、雷の如し、ウリセス、やがて、彼の四勇士と共に、杖を火中に投じて、之を赤らし、巨人の隻眼に、眼底も通れと刺し貫く。

巨人は、阿鼻燒熱の苦みに堪へかねて、悲鳴をあぐれば、四邊の

岩石、ために震動す、ウリセス、及び、その友は、かしこう、身を洞穴の凹處に潜ませつ。巨人は益す絶叫して、近隣のシクロペ等シクロペを呼びて、救ひを乞へり。とかくする程に、あたり近くシクロペの巨人ども、この叫喚の聲を聞きて、馳せ集まりつ、何事ぞやと彼れに尋ぬ。

『おはれ、友よ、われ死すべし、ノーマンわれを打てり。』

息も、絶え絶えに、ポリフェムスは、かく答へぬ。彼等巨人は之をきいて、

『若し、人ならぬもの御身を害すとせば、そは、必ず、ヨリ
グ大神の打撃ならむとこそ覺ゆれ、さらば、汝、これを』

忍ぶべし。』

と、告げ置きて、皆、立ち去りたり。

翌朝、シクロペ、その牧場に羊の群を追ひ行かむとて、例の巨巖を戸口より轉ばし、自ら洞口の傍に立ちて、手を洞内より外そとに出でゆくものに觸れぬ、そは、ウリセス等の逃れ去らむことを成れてなり。

されどウリセスは、洞穴の床上にありし杣柳をとりて、三頭の牝羊を縛し、その真中なるものに縫下しつゝ、自ら殿して、洞口を出でければ、巨人の注意怠りなしとはいへど、彼れの手は、只、背と側面とのみに觸れしのみ、盲目のかなしさは、毫も怪しむ

べき節たなしとして、たやすう、虎口を逃れしめぬ。

さて、ウリセス等、洞外に出づるや、牝羊の縛を放ち、おほかた、之を艦に打ち載せ、急ぎ纜を解きて、海岸を離れ、今は恐るゝ所なしとして、ウリセスは大音あげ、

『シクロペよ、神々たち、汝の残忍を悪み、罰して、汝の眼を奪ひ給ひぬ、いかに、シクロペたしかに聞け、汝に耻辱を興ふるは、かくいふウリセスなるぞ。』

と、高らかに呼ばはりければ、シクロペ、いかで黙だますべき、山腹より突き出づる千曳の岩を引き抜き、空中高う之をさし上げ、總身の力をこめて、聲せし方に投げ出せば、海水ために波た

ち騒さわぎ渦うずきて、艦も忽ち捲かれむとせしが、こゝを限りと擢ひき連れて、漸う岸を遠ざかるまゝに、再び、巨人を呼ばむとせしが、友人、強ひて押し止むれば、暫しは忍びつゝ、やがて、巨人の力も及ばぬ處に至り、またもや、彼を罵りければ、巨人もあらゆるあひをなす、島の叫び、艦の罵り、次第次第に遠ざかりつゝ、ウリセスの一行は、事なう、本艦に到り着きぬ。

—— エオルス、島 —— 風袋 ——

ウリセスの一行が、次に到りしは、¹⁾エオルスの島なりけり。

天地の大神、エビテル、かねて、このエオルスの國王に、風を御する力を與へ給ひければ、順逆強暴軟和微弱、いかなる風も、この王命に悖るはなし。さて、ウリセスこの島に來りしかば、エオルス王、いたく、これを歡待し、丁寧親切を極めたりき。やがて、ウリセス、罷り申しの暇を告ぐれば、國王、銀線して束ねたる一袋を、ウリセスに遺る、この袋には、恐しき風を押し籠め縛めて、また、暴力を振ふことなからしめたり、一行が航路の安穩なるべき順風にのみ、ウリセスの艦を吹かしめむとの、こよなき王の、はなむけ 盛なりけり。去る程に、一行は、いよいよ、エオルスの島を發しぬ。

素より、王の命ずる所なれば、吹きそふ順風、思ひのまゝに、白帆、まさきに、なむけ 孕むが如く、九日の航路をつゞけぬ。この間、ウリセスは、一睡をも食らず、自ら艦の舵を執りしが、さすがの英雄も、身體いたく疲勞して、覺えず、眠りに就きし程に、袋の謂れを知らざるものども、中に何物を秘めたるならむと、頭を鳩めて、評議をなす。袋は銀の線もて束ねたり、あはれ、國王の贈り物なるからに、必ず、いみじき寶物をこそこめたるべけれ、主の眠れる間に、少し盗まばやと、なご 嗚呼の輩、おろかにも彼の秘密の袋を開きぬ。開くとひとしく、立てこめられつる暴風の勢ひ、ものすさまじ

う、俄に海荒れ、大浪たち騒ぎ、吹きに吹き、すさびにすさび、ありし九日の^{いたつ}勞も、またく、徒勞に歸して、再び、出帆せるエオルスの港に吹き返されぬ。

エオルス王、先の好意に恃りたる一行の頑愚を怒り、最早、彼等を助けざりしかば、今は、只、すさすさすと、力を出して、櫂を漕ぎつ、たどたどしくも、航路を進めぬ。

——レストリゴニア人との冒険——

かくて、ウリセスの艦は、八重の潮路を進む程に、とある入江の、陸に包まれて、浪いと静かなる處に出でぬ、嬉しければ、皆喜び

勇みて、港に入る、たゞ、ウリセス一人は、艦を入江の外に浮べて、その奥深うは入らざりき。

こゝは、名たゝる野蠻人⁽¹⁾、レストリゴニア人の住む所なりき。をりしも、レストリゴニア人どもは、艦の入江に入りたるを見すまし、巨大なる石をとりて、彼の艦隊に投ちぬ。

巨岩の一撃、などかは、たまらむ、艦は残こらず、破碎せられ、水夫は、水に陥る所を、鎗もて餘さず、刺し殺す、鎗先にかゝらざるものどもは、一人として溺れ死せざるはなく、全隊、見る見る、レストリゴニア人の塵殺する所となりぬ。こゝに於て、たゞ、事なきは、ウリセスの艦のみ、やがて、ウリセス、乗組の人々を勵まし、

(1) Ææan.
(2) Circe.

櫂をいそがせ艦を早め、辛くもこゝを逃れ出てぬ。

— エエアン島 — チルクの妖術 —

ウリセス、さては、生き残りたる面々は、はかなくも野蠻人の毒手に罹りし友を悲み、破碎せられし艦隊を悼み、また、わが身自らの九死の中に一生を得たるを、こよなき天の恩寵と喜び、悲喜相半して、艦を造りつゝ、遂に⁽¹⁾エエアン島に到着しぬ。こゝは太陽の子⁽²⁾チルクの住むところなり。さて、一行は、この島に上陸し、丘に登りて、四方の谿谷を下瞰すれば、この島、人烟稀疎にして、只その中央部にのみ、人家の點綴

(3) Eurylochus.



するを見る外には、住居の形跡だに無し。その真中には、一む

ら林、神さびて、誠に宮居の在りとおぼゆ。一行は、乃ち⁽³⁾オイロロクスを先導として、その水夫の半を彼に授け、かの宮殿のある所に遣す。オイロロクス

等、やがて、宮殿に近づける時、獅子、虎、さては、狼などの猛獸、むらがり來つて、彼等を圍む、さはれ、これ等の猛獸は、曾て、チルケの妖術のために、その猛烈なる性質を失ひ果てたるなれば、いささかも害を及す事なし。

そもそもチルケは、勢力ある妖術を爲す一女神なり。これ等の動物も、かつて、一度は人なりしが、チルケの不可思議なる魔術にあひ、動物の姿を現せるなりけり。

彼の宮殿の裡よりは、美妙の樂の調べ聞え、これに伴ふ唱歌は、これ、妙へなる婦人の聲音なるべし。

もとこれ、林籟、自然の樂を奏する所に、取り取りの物の音、唱歌、

たとへむに物なし。かくて、オイリロクス、音高う、案内を乞へば、女神チルケ、出で來りて、彼等の行を導く。

さらでだに、樂は微妙の調べなり、宮居は莊嚴神さびたり、今この女神の姿にあひて、誰れかは、その身の危きを覺らむ、あゝ、殆いかな、オイリロクス、まさには是れ風前の燈のごとし。

女神は、まゆやかに、その賓客を誘ひて、座に就かしめ、葡萄の美酒と、くさぐさの珍珠とを侑め、歡待好遇、至らざるなれば、一行は、喜び禁ずる事能はず、快くその食をとれる時、例の女神は、怪杖を振り、一人一人に觸れたりしに、怪むべし、彼等は、忽ち姿かわりて、皆々豕の形に化し、あるは、頭を豕の頭に、あるは、聲音

を豕の聲音に、あるは軀幹を、あるは粗毛を、醜き様にかへられ、精神ばかりこそ、ありし人なれ、圈にこめられ、標實さては豕の飼ひ料、これこそ好む所なるべけれど、あさましくも投げ與へられつ。

この時、オイロクスは、獨り脱れて、艦にかへり、細かに、有りし事どもを語りぬ、ウリセス、之を聴き、自ら奮つて彼處に赴き、能ふべくんば、その朋友をも救はむと心を決め、單身、前方に進みゆく時、一人の青年あり、偶々親しく彼れに語りて、この行の危険を説けり。

青年名は、メルキユリー、メルキユリーの名は、已に、讀者の熟知

する所ならむ。

メルキユリー、チルケの妖術と、その危険とを説き、ウリセスの決心を翻へしめむとせしが、ウリセスの決心、極めて固う、その諫言を用ゐざるを知り、乃ち、彼女の妖術に勝つべき力を有するモリ、樹の嫩芽を與へ、且つ、用法を教へぬ。

ウリセス、之を得て、歩を進め、竟に、宮殿に達し、チルケの歓迎を蒙り、また、前の友になせしと同一の饗應を受けぬ。

チルケ女神は、ウリセスに美酒佳肴を侑めて後ち、例の魔杖を出だし、之をウリセスに觸れ、さて、いふやう、

『今より後ち、汝も、汝の友の如く、去つて彼の圈内に入

り、混濁汚穢の中に住めよ。」

と。

されど、ウリセスは、已に、豫防の秘薬を得たり、何ぞ女神に従は
ひや、却て、劔を抜き放ち、憤怒の容色、凄じう、女神に迫りぬ。
女神は、案に相違し、今は叶はじとや思ひけむ、跪いて、ウリセス
の膝下に哀を求め、いとも嚴かなる誓をなし、彼れの友人を許
して、ありし人の形にかへらしめ、これより後ちは、決して異害
をなす事あるべからずと約し、直に、前の人々を囿中より放ち、
姿をも舊に復せしめたり。

さて、それより、艦中なる残りの人々を招き、日に夜を續ぎての
饗應をなしければ、ウリセスも心解け、果は故郷に歸るをも忘
れて、たゞ、この島の安樂愉快かぎりなき生涯に甘ずるかと思
はるゝばかりになりぬ。

—— シレンスの島 —— 龍女の吟 ——

ウリセスは、エエアンの島に於て、危く、奇禍を買はむとせしが、
メルキエリーの秘薬を得て、幸に安泰なりしのみか、妖神ナル
ケを服従せしめ、剩へ、その歡待に、安樂と愉快とを貪り、殆ど故
國に歸るを忘れむとせしを、ウリセスの友は、切に、彼を諫め、高
尙き心に立ち返りて、疾く、本國さして出立すべき由、警めしか

ば、ウリセスも、こゝに、翻然として悟り、いよいよ、こゝを去らむとす、女神チルケも彼等の出發をたすけ、⁽¹⁾シレンス人の海岸を、事なう通過すべき術をさへ教へたり。このシレンスとは、海の龍女にして、彼等の歌ふや、聴くもの、そらるに心を動かし、不幸の航海者等は、知らず識らず、恍惚われ、われを忘れ、遂に海底の水屑となるに至るといふ。

チルケ、乃ち、ウリセスに教へて、水夫等の耳を、蠟もてふさぎ、以て、シレンスの妙調を聞かざらしめ、また、ウリセスは、自ら、身を帆檣に縛し、その命に従つて、水夫を働かしめ、敢て拒ましむる勿れと告げぬ。



ウリセスは、チルケの教に従ひ、蠟を以て、水夫の耳を塞ぎ、自ら身を帆檣に縛し、かくしてシレンスの島に近きけるに、海上、静にして、風濤起らず、彼方の島よりは、優に妙へなる歌聲きこゆ。

さうれ波、風のそよぎにつれて、水の面をわたり来る調べの聲、或は遠く、或は近く、宮商の音色、律呂の韻魂を奪ひ、心をあてがれしむるに、ウリセスは、堪へれども堪へ難く、忍べども忍びがてに、縛を脱し、聲する方に行かむと叫び、そなたに向ひて漕げと合圖し、もたえ苦むといへども、耳しひたる水夫どもは、以前の命

(3) Naples. (2) Parthenope.

を固く守りて、益す緊く彼を縛し、その航路を直進みに進めば、やうやう、島と遙かに離れて、龍女の吟も聞えずなりぬ。こゝに至りて、ウリセスは、耳より蠟を取り去り、併せて、また、己が縛を解かしめ、相互に無事なりしを喜び祝しぬ。去る程に、シレンスの一人なるバルテノベは、ウリセスの遁れ去りしを見て、自ら力の及ばざるを悲み、海に投じて失せぬ。彼女の屍、流れ流れて、以太利の海岸、即ち、今のネーブルスの地に漂ひ着きぬ、故に、この地、かつて、シレンの名によりて呼ばれにきとなむ語り傳ふる。

(3) Glaucus. (1) Scylla. (2) Charibdis.

— シルラ、カリブサスの二怪 —

ウリセスは、また、彼の女神チルケによりて、二怪⁽¹⁾、シルラと、カリブサスとを警められぬ。そも、このシルラは、もと嬋妍たる處女なりしが、⁽³⁾ゲラウクス、おのが失戀のために、チルケ女神に請ふ所あり、女神は、遂に彼のシルラをして、蛇の如き怪物とかはらしめぬ、その性質⁽³⁾、いと醜うして、數多の航海者を殺すこと、周く舟子の恐るゝ所なり。
(編者等が、既に岡崎屋書店より出版せしめし、希臘羅馬神話梗概胡蝶の處女五十七頁より七十五頁まで参照)
シルラは、その時より、千仞の斷崖、高う聳ゆる洞穴の裡に棲み、その長き首を出して、水夫どもを取り啗ふなり、彼女は六頭を

有するが故に、口もまた六つあり、口ごとに一人づつの餌を要すといふ。

今一つの怪物、カリブデスは、怪しき入江にして、一日に三度、恐るべき深淵を生じ、また、三度これを吐き出すなり。潮の、こゝに突き入る時は、凄しき渦を起し、その渦紋の達する所、舟として呑み込まれざるはなく、海神ネブチューンすら、如何ともする事能はずとぞ。

さて、ウリセスは、チルケの警めを聴き、この怖るべき二怪に近づきぬと覺しき時は、彼等を見出さむと、警戒をささ、怠りなかりき。

中にも、カリブデスが海水を吞吐する、大波小濤の叫喚する響きながら、百雷の如くなれば、遠くとも、その在處を知らむこと、甚だ難きに非ざりき。

されど、シルラに至りては、變幻出沒、殆ど端倪すべからず。

ウリセス、おまび、その一行は、注視、少しも懈るなく、さかまく水の流れ、激しき所を警戒しつゝ、ひたすら、航路に心を傾け、また、傍を觀る暇なきを、いかでかゝる時に乗じて、シルラのゆくりなき襲ひの來らむとするを知らむや。

かゝる折しも、怪物、シルラは、俄然、その恐しき蛇首を伸べ、六人の水夫を捉へぬ。水夫は、驚き、狂うが如く、絶叫すれど、いかに

せむ、シルラはこれを洞裡に運び去りぬ。
ウリセス、千軍萬馬の間に馳せ、武勇鬼神をひしぐといへど、この恐しき有様は、未だ昔て夢にだも知らざりしところ、また、如何にもせむやうなく、只茫然として眼前に悲鳴する水夫を見つゝ、その爲すがまゝに任ずるのみ。

ミルトンの⁽⁵⁾コムス詩中に、次の句あり。

“I have often heard

My mother Circe and the sirens three,

Amidst the flowery-kirtled Naiades,

Culling their potent herbs and baneful drugs,

Who as they sung would take the prisoned soul

And lap it in Elysium. Seylla wept,

And chid her barking waves into attention.

And fell Charybdis murmured soft applause.”

シルラとカリブデスとは、人の進路を塞ぐところの二つの反

對したる危険を表する諺として用ゐらる、羅典語の、

Jucidit in Seyllam, Capiens vitare Charybdim.

これなり、即ち、

『カリブデスを避けむことを願うて、シルラに走る。』

てふ意なり。前門の虎、後門の狼、なども似通へるにや。

- (1) Trinakria.
(2) Hyperion.

- (3) Lampetia,
(4) Phaëthusa.

チルケは、また曾て、ウリセスに、他の危険ある事を告げぬ。
シルラ、カリプデスの二怪を過ぎ、次に來るべきトリナクリア
島、即ち、是れなり。

この島には、太陽神⁽²⁾ヒペリオン、及び、曙の
父なりしが、後ち、その権力は、アポロによりて繼承せられぬ、か
かる事ども、委しくは、天馬卷末の神話總攸を見るべし、の家畜、
牧、養せられ、此處に在るものは、ヒペリオンの女、ラムベチア、及
び、⁽⁴⁾ファエツザ等なり。

而して、航海者の注意戒心せざるべからざるは、たとひ、船中の

食料、いかに缺乏を告げぬとも、決して、この島の家畜群に手を
觸るべからざること、これなり。

若し、過つて、之を怒らしむる事あらむか、天罰、立ちどころに至
つて、その身の滅亡、疑ひあるべからずといふ。

ウリセスは、かねて、チルケの警めを知れば、この島には、旋泊せ
ずして、通過せむことを望みたりしが、艦中の僚友は、皆、港に艦
を入れ、一夜の上陸に、疲勞を休めむと、懇願せしかば、已むを得
ずして、終に彼等の意に従ひたり。さはれ、艦員の上陸せむと
するに、先ち、ウリセスは、嚴かに、彼等に誓はしめて曰く、

『汝等、決して、神聖なる牧場の家畜に觸るゝ事勿れ、只、

チルケがおくりし食料を以て満足すべし。』

と。

ウリセスの宣言は、艦内に食物の續きし限り、その誓約を破るものもあらざりしが、久之、逆風頻に吹き、艦の纜を解くこと能はず、殆ど一ヶ月間の滞在を爲し、チルケより得たる食料も悉く盡きしかば、今や、艦員は、魚鳥を捕へ、これを屠らざるべからざるに至りぬ。

一日、ウリセスの不在に乗じ、彼等は、前の誓約を忘れ、聖牛の一人を捕へて、之を屠りぬ。

岸に歸り來れるウリセスは、之を見て、大に驚き、如何なる災禍

を被らむとて、憂慮措く所を知らず、果せるかな、こゝに、怖しき兆こそあらはれけれ。

彼の聖牛の皮は、地上を匍ひめぐり、肉片は、炙らるゝまゝ、鐵串に悲鳴す、その怪しきこと、言ふばかりなし。

やがて、追風吹き來りければ、急ぎ、帆をあげ、彼の島蔭を離れ、未だ遠くは進まざるをりしも、一天俄に掻き曇り、狂嵐咆哮して、海洋怒號し、雷鳴烈しく、激浪澎湃として空に漲り、紫電一閃、橋頭を打つよと見えしが、忽ち水先案内者を殺しぬ。これより、風は益す荒び、海はいよいよ激し、狂瀾怒濤、艦も、竟に寸裂せられぬ。

ウリセスは、獨り、木片を見出で、これにたよりて、波のまにまに、彼方此方と漂ひしが、いつしか風の方向かはりて、身はカリブソンの島にうち寄せられぬ。

ウリセスは、かく、一命を全うしぬ、他は一人として溺死せざるものなかりき。

—カリブソ—女神の戀—再度の破船—

カリブソは海の水神にして、その位地、神よりも低き女神の一階級なり、しかも、なほ、神の屬性を有す。

ウリセスが漂着せしを見て、カリブソは大に悦び、款待優遇、至

らざる限なく、つひに、ウリセスを戀ひ慕うて、長く、彼をして、この島に止らしめ、永久に、おのがものと爲さまく思ひぬ。

さはれ、ウリセスはなつかしき故郷あり、なつかしき妻子あり、漂流多年、行く方知れざるわれを懐うては、いかにその日を送るらむなど、今この絶海の孤島にありて、朝暮日夜、片時も忘れ難きに、いかで、女神に従ふを得む。ウリセスは、只管、故郷に歸らむといふ。カリブソ、心、頗る穩ならず。

かゝる時しも、ヨーヅ大神、使者メルキユリーを、カリブソの許に遣し、ウリセスを許すべく命じ給ひぬ。

さて、メルキユリーは、カリブソを巖窟の内に見出でぬ。

ホメロスのことばもその巖窟の有様を述べれば左の如し。

(譯はツツバリーのによりぬ。)

“A garden vine, luxuriant on all sides,
Mantled the spacious cavern, cluster-hung
Profuse; four fountains of sereneest lymph,
Their sinuous course pursuing side by side,
Strayed all around and every where appeared
Meadows of softest verdure purpled o'er
With violets; it was a scene to fill
A god from heaven with wonder and delight.”

幾重生ひそふ葛のつら

八尋岩室岩垣を

おほひおほふや葛のつら

眞玉眞清水玉清水

四つの流れのきやくと

並みてめぐるや玉清水

あたりに廣き柔艸の

一つ緑りを染めなして

むらさき匂ふ花すみれ

天降りましつる神心

牧の眺めを珍しみ

めでみだへみおはします

(3) Mentor.

(1) Fénelon.

(2) Telemachus

カリブンは、快からず思へども、ユピテル大神の御言なれば、如何はせむ。

女神は、こゝに、筏を作るの材を供へ、數多の糧を積み、順風をウリセスに興へたりき。

ウリセス、やがて、この島を發し、數日の間、樂しく航路をつゞけしが、早くも、彼方に、陸地の影を、縹渺として認むるに至りぬ。

心うれしうて、たゞ、急ぎゆくに、ふさまく嵐波いと荒う、帆を破り、筏を碎きぬ。

この時、慈悲に富める女神ありて、ウリセスを慰み、鷗の形に現じて、筏の上にくんだり、彼に一條の紐を授け、そを胸下にまとは

しめ、浪にまかせば必ず浮ぶべし、やがて、陸に達せむ、と教へたまふ。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

⁽¹⁾ フェネロンが傳奇小説テレマクス中には、

ウリセスの子、その父のゆくへを尋ねて、各地をさすらひしが、かのカリブンの島にも到りぬ、女神は、曾て、ウリセスに爲し、如く、あらゆる方法をめぐらして、テレマクス(即ち、ウリセスの子なり)を止めむと試みしが、ミネルワの神、彼れの友、メントルの姿に現じて、彼に伴ひ、彼を保護して、女神の誘惑

を免れしめ給ひぬ、然れども、終に、百計盡き、断崖の絶頂より、
二友、相擁して海に投じ、海岸より少し離れたる舟に泳ぎつ
きけるよしを記せり。

ハイロンは、また、テレマクセスとメントルとの海に投ぜる様
を、次の詩句にも、のしぬ。

“But not in silence pass Calypso's isles,

The sister tenants of the middle deep;

There for the weary still a haven smiles,

Though the fair goddess long has ceased to weep,

And o'er her cliffs a fruitless watch to keep

For him who dared prefer a mortal bride.

Here too his boy essayed the dreadful leap,

Stern Mentor urged from high to yonder tide;

While thus of both bereft the nymph-queen doubly sighed.”

——ソエアチア——ミノルソの神助——歸航——

話頭、舊に復して、ウリセスは、再度の破船に遇ひ、筏の断片に身
を托して、波のまにまに漂ひしが、終に、これすら彼を支ふるこ
と能はざるを見て、靈鳥より得たる紐をまといひて泳げり、ミネ
ルワ神は、彼れの前に波を静め、後に風を送りて、岸に打ち上げ
しめむの企を運し給ふ。

- (1) Phaenicians.
 (2) Scheria.
 (3) Nausithoüs.

れど、生命絶えねば、いかゞはすべき、とまれ、かくまれ、力の限り、生存へて見むとて、四邊に目を注げば、少し隔りたるところに一つの森あるを知り、まづ、そなたへ歩みを運びぬ。到れば、鬱蒼たる樹木、争うて天に聳え、枝葉の覆ふ所、日影も雨も漏り来まじかりければ、木蔭の草に身を横へ、あり合ふ木葉をかき集めて、假寝の床に、暫しの眠りを食りぬ。このウリセスが上陸せし地は、⁽¹⁾フェアチア人の國なるシエリアなりき。そもそも、これ等の人民は、昔は、シクロペに近く住ひし事もありしを、彼の野蠻なる種族に攻められ、その王、⁽³⁾ナウシトウスの號令のもとに、シエリアの島に移住し來れるなり

初めは、山なす大浪、岩に碎けて、うづまく海に漂ひけれど、暫くにして、いと静なる潮流の口にむかひければ、やうやく、陸に泳ぎ付きぬ、さはれ、精氣も既に盡き果て、通ふ息さへ微に、死人にもひとしき有様なりき。稍ありて、ウリセスは、われに反り、きと眺むれば、身は陸に在り、歡喜雀躍、地に接吻して、天恩を謝せしが、思へば、まさに、何處にかその進路を取るべき。さて、春秋幾年の、楯を褥の野營の夢の、覺むる間もなく、涯りも知れぬ海路に、さすらひ、友にはわかれ、郎等には殘され、いつまで、かゝる世界に、さまよふ事ぞと、わが身ながらも、淺ましけ

けり。

彼等は、神族に近き民人にして、彼等が神々に犠牲を供ふる時は、神々と共に食事を爲し、謹恪齊肅、神々の御前に、毫も疚しき所なければ、家富み、國榮え、曾て、他國の侵害を受けず、領土の一抔も外寇の掠むる所とならず、鬪諍攻伐の聲は未だ耳にせざるところなりき、否、ひしろ、弓箭を備ふるの要だにあらざるなりき。

彼等の最も喜ぶ所は、航海の一事にして、彼等の船は、疾きこと鳥の如く、しかも、自ら爲すべき所をなし、港に入るの必要もなく、水先案内をももちゐざりき。

ナウシトウスの子アルチノウス、賢明にして政をなすこと公平に、君臨よく、庶民の意を得たりといふ。

去る程に、ウリセスがこの海岸に漂着し、ありく、木蔭の草枕に、假寝の床を借りしその夜、國君の姫君ナウシカア、夢に、ミネルフ女神の神託を受けぬ、そは、ナウシカアの嫁ぎ既に近し、急ぎ、總ての衣服を洗ひ清むべし、となり。

衣服を洗ひ清めむほどの事、いと容易かるべしと思はるれど、さに非ず、洗ひ濯ぐによき泉は、遙かの彼方にあり、幾千裏の夥しき衣服は、ことごとく、其處に運ばれざるべからず。

されど、姫君は、夢より覺めて、父と母とに、他し事にかこつけて、

衣服洗はむことを申し、その許しを得ぬ。

かくて、父君は、直に、侍臣をして、車を用意せしめ、衣服のことごと、積みかさね、又、母君の助をかりて、食物と葡萄酒とを夥しく、車に載せぬ、さて、姫君は車に乗り、自ら鞭を執り給へば、侍女どもは、徒歩して、姫の車を追ひぬ。

やがて、車は、河邊に着きぬ。

侍女どもは、騾馬を解きて、食を與へ、車より衣服を取りおろして、水に濯ぎ、樂しう速に、その幾千襲を洗ひ清めぬ、かくて、岸に濕へる衣服は、日影に曝し、後ち、各々、水を浴みて、積み來し食物を味ひぬ。



食事終りて、彼等は、球あそびをなす、姫君は、歌をうたひて、遊びの調子をとり給ふ。とかくする程に、時も移りぬ、衣服も乾きぬ、今は、市に歸らむと準備をなす、をりしも、ミネルワの神姫君

をして、球を水中に投げ入れしめぬ。侍女ども、之を見て、あなやと叫ぶに、その聲、ウリセスの夢を破りぬ。

侍女どもの叫び聲に、ウリセスは目を開き、四邊を見れば、身は森蔭の草の上に、假寢の夢を結べるなりしが、もとより、カリブンの島を逃れ出で、筏の難破に遇ひし時、漸く、身を以て逃れしのみなれば、全身すべて、赤裸々にし

て、一絲をも着くる事なし、今年わかき婦女の一群、近きになりて、助けを請はむと思ひながらも、かゝる姿してはさすがなり、殊さら、物言ひ立ち振舞も、いとやごとなき有様なれば、如何はせむと踟躕ひしかど、飢渴たへ難う、忍ばむ術もなく、樹の杖折り取り、腰をかくしつゝ、木立の茂き處を見出でて、やをら其方に進み寄りぬ。

侍女どもは、之を見て、大に駭き、四方へ散亂せしが、只、ナウシカアは、ミネルツの神助によりて、勇氣を鼓し、旅人の近づくを待てり。

ウリセスは、その姿を羞ぢ、殊に、彼方は妙齡窈窕の處女なれば、

無禮を恐れて遙に隔り、過ぎし悲境の一伍一什を残りなく、物語り、さて、衣食の助けを乞ひぬ。彼は、處女を、女王とや思ひけむ、女神とや思ひけむ、そはとまれ、必ず救助せらるべしと、確く信じて願ひしなりけり。

姫君は、ウリセスの物語に耳を傾け、只管、同情の涙に咽ばれしが、さしあたりての救助を諾ふと共に、歸りて父王に申し聞え父よりもまた助けまゐらするやう取計はむと、他事なう約したまひぬ。

されば、彼方此方に、逃げかくれたる侍女どもを呼び集へ、いたく彼等を叱りこらしつゝ、わがフェアニア人は、世に恐るゝ所な

かるべき事を論し、この人こそは、いとも幸なき旅人にておはすれ、とて、急ぎ食物と、姫君の兄弟の衣服とを、車より取り來らしめ、ウリセスに捧げしめぬ。

ウリセスは之を得て、一たび、森の木がくれに退き、鹽くさき身體を洗ひ清め、衣服を纏ひ、食事をも終へければ、心、いと爽かになりぬ、もとより、威風凛々たる英雄なるに、パラス女神は、なほ、姿を清め、その廣き胸と、勇壯なる額に、威嚴を装はしめ給ひければ、天晴、好個の偉丈夫となりぬ。

姫君は、これを見て、彼の魁偉なる容姿に驚嘆し、かゝる夫をわれに給ひぬと、心の中に神々を念じ給ふ、さて、ウリセスにいひ

けるは。

『野路通りゆく、わが一行に随ひて、市に來り給へ、されど、市に近づきなば、故知らぬ市民どもは、中々に、かゝる旅人を伴ふことをあやしむべければ、一行が遙に宮殿にかへり入るを待ちて、宮苑に進み入り給へ、さて、そこにて逢ひたらむ人と共に、王宮にまゐり給へ。』

と言ひ聞えぬ。

かくて、車は驟馬して牽かれぬ、侍女どもは、姫君に供奉しまゐらせぬ、ウリセスは、命のまにまに、その一行に随ひ、野路を過ぐれば、市は近かり、されど、姫君の言葉をおもひ、市街に近き一む

ら林の中に憩ひぬ。

やがて姫君の一行、遠く距れば、ウリセスは、林を出て、將に市街に入らむとする時、水酌まむとて、水甕もてる、うら若き處女にあひぬ。

こは、ミネルフ女神の化現し給ふなりき。

ウリセス、乃ち、彼の女に向ひ、アルチノウス王の宮殿に導かれむことを乞へり、彼女之を聞き、わが父の家は、幸ひ、王宮のほとりなればとて、快う諾しぬ。

かくて、ウリセスは、ミネルフ女神に、案内せられて王宮に急ぐ、神の雲霧、八重に彼等を立ちこむれば、四民群集の巷を、旅人と

知られずして過ぎ行きつゝ、見渡せば、千船、百船、並み立つ帆柱は、林のやうに、幾千萬の人の往きかふ巷の塵は、雲の如く、中にも、勇士の公會堂とおぼしくて、嚴しき建物に、集め來るますらをの物具、金光燦爛として、さながら、人目を眩せしめぬ。ミネルフ女神は、ウリセスを導きつゝ、一々、この王國の狀況、及び國王人民のことどもを語る。

ウリセスは、王宮に入るに先ち、まづ、詳に、四邊の光景を觀察するに、莊嚴華麗、金碧の光り、魂を奪はむとす。

黄銅の壁、煌々として、日光に映じ、王宮の入口より、内部の建物につゞけり、その戸は、皆、黄金にして、戸の柱は、悉く銀なり、門扇

もまた銀にて、黄金を鑲めたり、宮門を入れれば、金銀もて鑄たる
獵犬、並び立ちて、門を守るかと疑はる、壁に沿ひては、席あり、フ
エアチアの婦人等が織れる、いみじき織物もて覆はれたり、こ
こに、皇子等は、その食をとり給ふなりとぞ。
また、黄金づくりの肖像、並び立てり、こは、食時には、その手毎に、
蠟燭を點ずれば、四邊照り耀きて、目もくらまむ許りなり。
五十の婢は、あるは、穀を磨り、あるは、機を織り、あるは、くさぐさ
の務めに従ふ。

この國の男子は、皆、航海の事にかゝづらふが故に、女子は、家政
を、總て取りまかなへば、この事にとりては、こよなく他國の婦

人にすぐれたりとなむ。

さて、宮殿の外苑を見れば、いと大なる園生には、多くの喬木簇
生し、柿、榴、梨、林檎、無花果、橄欖など繁茂せり、而して、冬の日の
霜雪も、てりはたゞく夏の日も、絶えて、これ等の樹木の成長を
妨ぐる事なければ、いつも、常盤の色深う、一方の花期には、他は
實り、一方の熟する時、他は、蓄をもてり、葡萄も、いたく繁りあひ
て、此方には、累々たる房、熟せむとせるかと見れば、彼方には、園
丁の來りて、葡萄酒を醸せるあり、實に、花さき、實り、青葉若葉、春
夏秋冬一時に來るかと思はるゝ。
園のめぐりには、黄、紫、白、紅、百花咲き香ひ、天の妙手、その技

巧を擅にせるあり、園の中央には、二つの泉、廣うして清冽の水を湛へ、かつは、蜘蛛の河水と流れ、かつは、王宮に導かれて、また、市に通じ、市民のこれによりて供給を仰げるあり。

ウリセスは、之を嘆稱して、彼方此方と見巡りしが、ミネルワ、彼の身邊に、雲霧を立たせ給へば、在處は、人に知られむ様なし。ウリセスは、かく、詳に、王宮の光景を熟覽して、後ち、その國の勇士首長等が、神酒を灌ぎて、メルキユリーを祭れる祝筵の客室に近う進みぬ。

ミネルワ、こゝに至りて、かの雲霧を取り拂ひ給へば、ウリセスは、女王の前に進み出で、その膝下に跪き、御惠によりて、本國に

歸ることを得ば幸なり、とぞ懇願しける。かくて後ち、ウリセスは、爐邊に退き拜伏しぬ。

餘りのゆくりなさに、一座の人々、皆驚きて、顔と顔とを見かはずのみなりしが、暫くありて、一老人すべり出で、王にいひけるは、

『われ等にむかひて、おはれみを乞ふ旅人を長う黙さむといかいなり、歡んで、この不幸の旅人を迎へざる

は、ズエアチア人の禮に非じ、疾く、彼を、われ等の團樂に入れ、食物と葡萄酒とをもて、饗應すべし。』

とぞ申しける。王は、老人の言葉を聞き、手を以てウリセスを

請じ、王子の席を、彼に譲らしめぬ。彼は、山海の珍味と、甘露の如き葡萄酒とによりて、心身大に爽快になりぬ。

かくて、王は、明日、この旅人の救助に關する會議を開くべしとて、その日の宴會を閉ぢぬ。

總ての賓客、退出して後ち、ウリセスは、王と女王と共に止まれり、その時、女王、ウリセスに向ひ、素姓、本國を問ひ、また、その衣服を如何にして得たるかを尋ねたり、ウリセス、カリブソの島を出でてより、姫君の救に遇ひし迄の事ども、逐一に答へければ、王と女王とは、一々之を聞れ、故郷に歸るべき船をおくらむと約し給ふ。

翌日になりぬ。

フエアチア國中の重なる面々、王の召に應じて集ひ來りぬ。さて、會議の結果として、一艘の船と、精選せる水夫と、準備せられぬ。

かくて、件の水夫どもは、一同、王宮に招かれ、盛大なる饗應を受けたり、宴果て、後ち、彼等は、珍客の前に、勇壯なる餘興をなして、心を慰めむことを命ぜられたり、こゝに於てか、水夫どもは、皆、遊戯場に走り出でて、或は、競走、或は、角力、その他、くさぐさの運動をなし、熟練なる技を演じたる後ち、ウリセスにも一藝を望みしかど、初めは之を辭退しぬ。然るに一青年、彼れを辱めけ

ればウリセス起ちて、フェアチア人の投げ能はざる重き投環
をとりて、彼等の投げし間隔よりも、遙に遠く投げやりしかば、
一同は、いたく驚き、前にもまして尊敬の念を生じぬ。終りて、
皆々、再び客室にかへりぬ。こゝに、使者を盲樂師⁽⁶⁾デモドクスに
遣し、彼を召さしむ。やがて、

“Dear to the Muse,

Who yet appinted him both good and ill,

Took from him sight, but gave him strains divine.”

善きと悪しきといづれにまれ、彼を撰みて、物視る力は奪へど、
神の調を興へたるミューゼの愛人

なるデモドクスは來りぬ。

彼は即興詩人にして、秀句もとより、口を衝いて出づれば、希臘
勢が計を以てトロイに攻め入りし、木馬を題として歌ひ出で
ぬ、アポロ神、その妙へなる歌の神力もて、彼れに感應し給へば、
合戦の有様いと凄まじく、はた勇ましく、目前に見る如く調べ
爲せば、満座の人々に、めでたふること、限りなし、獨り、ウリセ
スは、漫に今昔の感に勝へず、流涕滂沱たるを、王アルチウス之
をおやしむ、デモドクスの歌終るや、ウリセスに向ひ、何が故に、
御身は、トロイの軍物語を聞きて、かくば涙を流し給ふと尋ね
たり。ウリセス今は包まむ由なく、初めて、眞の名をわかしか

れば、一座の人ども頻に、その後の經歷を語らむことを求む。彼が語りし冒険談は、いたく、フエアチア人の同情と賞讃とを博し、王は、自ら贈り物を取りて、之をウリセスにとらせぬ。一座の面々、思ひ思ひにまた、貴重なる贈り物を爲しければ、彼は金銀財寶を船に積み込み、翌日、フエアチアの海岸を去り、暫くにして、船は、本國イタカに着きぬ。

船のイタカに着きし時しも、ウリセスは、たまたま、睡眠したりしかば、水夫等は、眠れるまゝに、彼を運びて上陸せしめ、くさぐさの贈り物は、箱にこめて、彼れの傍に置れ、そのまゝ、再び、帆をあげて、フエアチアに歸航しぬ。

かく、ウリセスは、フエアチア人の助けによりて、事なく、故國に歸りきとはいへど、海神ネプチューン、獨り、その手より、ウリセスを奪ひしを憤り、復讐として、フエアチア港内の船を、巖に變じて、港口に置きぬ。

* * * * *

フエアチア人の船に関する、ホメロスが記述は、今日の蒸汽船の驚くべき豫言なりといふものあり、アルチノウス王がウリセスに告げし言葉を見よ。

"Say from what city, from what regions tossed,"

(7) Lord Carlisle.
(8) Corfu.

しを見れば、そも如何なる船なりけむ。
* * * * *
土耳其及び希臘海を航せし、⁽⁷⁾カアリスル卿の日記に、⁽⁸⁾コルフ島に就きて、左の記事あり、コルフ島は、卿が昔時のフェアチア島なるべしと想像せるもの也。
『その位置は、オデッセを説明するに足るべきものあり、港灣と、溝渠と、大洋とを俯瞰すべき岩礁の尖端に、緑草敷きつめたる祭壇こそ海神の宮居に適したる所なりけむ。また、港灣の口に當りて、繪くが如き巖あり』

And what inhabitants those regions boast?
So shalt thou quickly reach the realm assigned,
In wondrous ships, self-moved, instinct with mind;
No helm secures their course, no pilot guides;
Like man intelligent they plough the tides;
Conscious of every coast and every bay
That lies beneath the sun's all-seeing ray."

Odyssey, Book VIII.

『風を知りておのづから動き、舵なく、水先案内なくて航路を誤らず、智慧ある人の如くに、潮を切り進むなる。』と云ひ

りて、その上に寺院あり、一説には、この殿、即ちウリセスを乗せたる小船の變ぜしものなりと。

島中に、唯一つ、河の流るゝあり、この河は、市と王宮とより、程よき處にあり、姫君、ナウシカアが車に駕し、侍女を率ゐて、衣服を濯がしめし古跡と見むも、決して不當ならじ。

されば、このコルフ島こそ、恐くは、フェアチア人の住せし所なるべけれ、云々』

— 歸郷 — 父子の再會 — 復讐 —

さても、ウリセスが、イタカの故郷を辭してより、指を屈すれば、

茲に二十年、トロイの役に、兵馬倥傯、軍中に裘葛を改むる事十たび、歸帆、トロイの港を發してより、名も知らぬ國に漂ひ、いみじき危難に遭逢し、流離困頓、寢食を安んぜざる事、また、十年、今なつかしの故郷の地に、彼は眠りより覺めたれども、自ら己が故國を認識せず、たゞ、記する所は、歸郷の航路にありし事のみ。さても、何時、誰が、われを船より下し、こゝはいづくに殘し置きけむ、如何にかすべきと茫然たるをりしも、女神、ミネルフ、若き牧者と現じ給ひ、ウリセスに向ひて、その居る所は、イタカの故郷なることを告げ、また、宮庭の有様をも、詳に、語り聞え給ひぬ。思ひ出づれば、二十年の昔となりぬ、ウリセス、トロイ問罪の師

に列りて、出陣せし後、時を經れども、つひに歸らず、消息は絶え、生死も知るに由なかりければ、妻ベネロペの後夫たらむと乞ふもの數を知らず、イタカ、さては、近傍の鳥々より、百の貴族ども集ひ來り、皆、ウリセスを死せりとなし、宮庭に止りて、さながら、宮殿と庶民との主人の如く、不禮の振舞、見るに忍びず、ベネロペは、貞節もとより匹なければ、ときてぬふ衣、夫の歸らむ日を頼みに、さりげなう彼等を遇すとなむ、これ女神の宣ひしところ、また言ひたまひけるは、汝若し、この讐を報せむとならば、よろしく深く身を晦まし、ゆめ／＼人に知らしむべからずと警め給ふ。かくて、ミネルワ女神、彼を醜き乞食に變じ給ひけ

れば、ウリセスは、おのが家に會て使ひし、牧豕者、オイメウスの許に赴き、大にその厚遇を受けぬ。
ウリセスの子テレマクスは、父の行方を尋ねむとて、トロイより凱旋したる諸侯伯を歴訪し、おまねく、ウリセスの死生を問ひ、今は、このイタカに在らず、されど、その旅中にて、ミネルワ神の託宣を蒙り、直に、結束して、故國にかへりぬ。
テレマクス、イタカに達するや、宮庭にかへり、彼の貴族どもを見るに、先ち、詳に、國政の有様、朝庭の實況を知らむとて、オイメウスの許に至りしが、例の乞食を、父ならむとは如何でか思はむ、異邦人として、彼を待ち、出來む限りの助けをもせむと、頼も

しう彼に誓ひぬ。

オイメウスは、密に、宮庭に赴き、母ペネロペにテレマクスの歸國を報じぬ、密に告ぐる所以のものは、暴慢無知の求婚者どもは、かにかくに、テレマクスを悪み、陥れ、殺さむと計り居ればなり。

さて、オイメウスがペネロペの許に至れる間に、ミネルワ、ウリセスにあらはれ給ひ、その子に、實を明さむことを命じ給ひ、ウリセスに觸れて、直に、老弱、貧困の姿をとり去り、ありし偉丈夫の風采を與へ給ひければ、テレマクスは、之を見て、大に驚き、よも人間にはあらじと疑ふ、されど、ウリセスは、自ら、父なる事を

知らせ、容姿のかはれるは、ミネルワ女神の御業なることを告げぬ。

“Then threw Telemachus

His arms around his father's neck and wept.

Desire intense of lamentation Seized

On both ; soft murmurs uttering, each indulged

His grief.”

年月を重ねて、生死をも知らざりし父子の再會に、悲喜交も至りて、相抱きけむ有様、たゞ想ふべし。

久之、父子は、互に、如何にして、かの貴族どもに復讐すべきかと、

肝膽を碎きて、熟議を凝しぬ。遂に、謀を定めて、テレマクスは昔のまゝに宮庭に赴き、われは乞食として、彼庭に行くべし、と一決しぬ。讀者は、必ず、乞食の宮庭に赴くことを怪み給ふべし、されど、往昔、乞食は、旅行家、談話者として、貴族の間に交り、屢々客として遇せられたる也。素より、乞食が、貴族に卑め侮られたるは、論なかるべし。

ウリセスは、テレマクスに諭して曰く、

『汝は、たゞ、乞食として、われを遇せよ、かまへて、親密なる舉動をなすべからず、たとひ、嘲られ、罵られ、辱められ、弊たれむとも、汝、よく、情を忍びて、疑を挾ましむべし。』

からず、若し、この約を破らむか、われ等の計、忽ち露顯すべきなり。』

かくて、宮庭に入りて見れば、貴族等は、陰に、テレマクスの旅中に異變あれかしと祈りしを色にもあらはさず、彼の歸國を迎ふと稱して、盛宴を張り、頗る、放肆、驕奢を極めたり。老乞食も、また、食卓を共にするを許され、席末につらなりしが、宮庭に老犬あり、今は衰へて、屢時の如くならざれども、ウリセスが入り来るや、人は、皆、彼れの風采と容貌とのいたく變れるによりて、そのウリセスたるを認めざりしかども、老犬は、忽ち、

その首をあげ、尾を掉り、耳を垂れて、かつて遊獵に舊主に従ひし時の如し。こは、これ忘れもやらぬウリセスが愛犬アルグスなりけり。

“Soon as he perceived

Long-lost Ulysses nigh, down fell his ears

Clapped close, and with his tail glad signs begave

Of gratulation, impotent to rise,

And to approach his master as of old.

Ulysses, noting him, wiped off a tear

Unmarked.

.....Then his destiny released

Old Argus, Soon as he had lived to see

Ulysses in the twentieth year restored.”

さて、ウリセスも客室に列座して、歓迎の饗を受けしが、貴族どもは、案の如く、老乞食を侮辱せり、老乞食は、詞おだやかに、これに答ふるを、貴族の一人席を離れて、腰掛とり上げ、散々に打擲す、テレマクス、之を見て、憤慨に勝へず、父の爲めに、侮辱者を懲さひとせしかど、父の訓誡を思ひ出で、涙を飲みて、たゞ、主人の賓客に對する禮をつくしむたり。

既に前にも記し、如く、婚をペネロペに求むる貴族、百方、甘言



をもて誘へども、ペネロペは辭柄を設けて、これに應ぜず、こゝに數多の歲月を送りしが、ウリセスの消息、杳として聞えず、今は、早う幽界の人となり給ひしかと思ひあきらめ、また、その子テレマクスも成長して、國事を託するに足れば、すなはち、求婚の貴族中より、武勇絶倫のものを擇び、その妻となるべき日に達しぬ。貴族の武技は、弓術もて試みられむとす、夜中、懸くるに十二輪

を以てし、一矢これを貫くものは、ペネロペを娶りて、自ら王たるべしと。

曾て、勇士の一人が、ウリセスに與へたる弓、藏して武庫にあり、この日は、これを取り出しぬ、テレマクス、注意周匝、萬一を慮りて、武器を、宮中に置かず、皆、之を武庫に藏せしめたるなりけり。演技の準備整ひぬ、第一に、弓に弦を張りざるべからず、弦を張ることは、先づ、テレマクスに命ぜられぬ、されど、弓は硬直にして、到底、これを施し難し、乃ち、力及ばずと爲し、之を他に託しぬ、受取りし人も、また、テレマクスに同じく、友人の罵詈訾笑中に、それを抛ちぬ、第三の人は、脂肪をもて、之を磨せしも、つひに、曲ぐ

る事能はざりき。總ての人々、次々に、試みしかど、一人として能くするものなし、こゝに、老乞食は、自ら之を試みむといひぬ。

『これ、今は、おちぶれて、乞食となりて候へども、むかしは、弓矢を取りしことも候ひき、この老腕、なほ、いさゝ

かの力は残りたると存じ候ふ、試み候はむ。』

貴族の一人、之を聞き、すでに、嘲罵の聲を發せり、かゝる無禮ものは、客室外に放逐すべしといふものもありき、されど、テレマクスは、老翁の心ゆかせなればとて、弓をとらせぬ。

ウリセスは、弓をとりにぬ。

これぞ昔の手なれの真弓、懷舊の情、鬱勃として禁ずるに能は

ず、彼は、容易に弦を張りぬ、かくて、矢を番ひつゝ、満月の如く引き絞りて、ふつと十二の輪を貫きぬ。

一座の姦佞ども、これは、と驚く間もあらせず、

『今は、好し、他の的をこそ。』

とて、矢庭に、貴族の一人なる、さきに、最も、嘲りを放ちし者の頸を貫きて射ふせぬ。

テレマクス、オイメウスを初めとして、他の忠實なる臣下ども、もとより、用意したる事として、直に、武器とり装ひ、ウリセスの味方をなす、貴族の群は、武器を求むれども在らず、周章狼狽、逃げむとすれども、早や、ウリセスは、戸を閉しつ、ウリセスは、

(3) Pheims

(4) Medon

『われこそ、多年、他國にさすらひしウリセスよ、妻や子を辱めし恨みおもひ知れ。』

と叫びつゝ、片端より、彼等を打ち殺しぬ。

許されたるは、只、歌人フェミス⁽³⁾、使者メドン⁽⁴⁾あるのみ。

これより、ウリセスは、再び、イタカの宮庭に、楽しき春秋を送り
きたなむ。

* * * * *

フェミンのオヂッセに関する詩あり、こゝに附載す。

“It little profits that an idle King,

By this still hearth, among these barren crags,

Match'd with an aged wife, I mete and dole

Unequal laws unto a savage race,

That hoard, and sleep, and feed, and know not me.

I cannot rest from travel: I will drink

Life to the lees: all Aines I have enjoy'd

Greatly, have suffer'd greatly, both with those

That loved me, and alone; on shore, and when

Thro' scudding drifts the rainy Hyades

Next the dim sea: I am become a name;

For always roaming with a hungry heart
Much have I seen and known ; cities of men
And manners, chinates, councils, governments,
Myself not least, but honour'd of them all ;
And, drunk delight of battle with my peers,
For on the ringing plains of windy Troy.
I am a part of all that I have met :
Yet all experience is an arch wherethro'
Gleams that untravell'd world, whose margin fades
Forever and forever when I move.

How dull it is to pause, to make an end,
To rust unburnish'd not to shine in use !
As tho' to breathe were life. Life piled on life
Were all too little, and of one to me
Little remains ; but every hour is saved
From that eternal silence, something more,
A bringer of new things ; and vile it mere
For some three suns to store and hoard my self,
And this gray spirit yearning in desire
To follow knowledge like a sinking star,

Beyond the utmost bound of human thought."

"This is my son, mine own Telemachus,
To whom I leave the sceptre and the isle——
Well-loved of me, discerning to fulfil
This labour, by slow prudence to make mild
A rugged people, and thro' soft degrees
Subdue them to the useful and the good.
Most blameless is he, centred in the sphere
Of common duties, descent not to fail

In offices of tenderness, and lay
Meet adoration to my household gods'
When I am gone. He works his work, I mine.

"There lies the port: the vessel puffs her sail:
There gloom the dark broad seas. My mariner,
Souls that have toil'd, and wrought and thought with me——
That ever with a frolic welcome took
The thunder and the sunshine, and opposel
Free hearts, free foreheads—you and I are old;

Old age hath yet his honor and his toil.
Death closes all : but something ere the end,
Some work of noble note may yet be done,
Not unbecoming men that strove with Gods.
The lights begin to twinkle from the rocks :
The long day wanes : the slow moon climbs ; the deep,
Means round with many voices. Come, my friend,
Tis not too late to seek a newer world.
Push off, and sitting well in order smite
The sounding furrows ; for my purpose holds

To sail beyond the sunset, and the baths
Of all the western stars, untill I die.
It may be that the gulfs will wash us down :
It may be we shall touch the Happy Isles,
And see the great Achilles, whom we knew.
Tho' much is taken, much abides : and tho'
We are not now that strength which in old days,
Moved earth and heaven, that which we are, weare :
One equal temper of heroic hearts,
Made weak by time and fate, but strong in will

To strive, to seek, to find, and not to yield.

(三) オヂツセに關する文學

ウリセスに關して書けるもの、

シエクスピヤ、テニソン、ランドル、など。

ミルトンの『ユムス』のうちブツチャナンの『クラウド、ランド』

ホープの『レーブ、オブ、ロック』

ペネロペに關するもの。

ブツチャナン、ステッドマン、ランドルの詩篇。

チルケに關するもの、

マシユ、アーノルドの『漂泊ふ旅人』

フツド、ライカス等の『チェントウル』詩中、

ロセツチの『サース(チルケ)の葡萄酒』

ザツクスの『チルケの魔術』

その他、シエクスピア、ミルトン、ホープ、クーパー、キーツなどの諸作。

シレニア人、および、シルラに關するもの、

ダニエルの『ウリセス及びシレンス人』

ローエルの『シレンス人』など。

カリブツに關するもの。

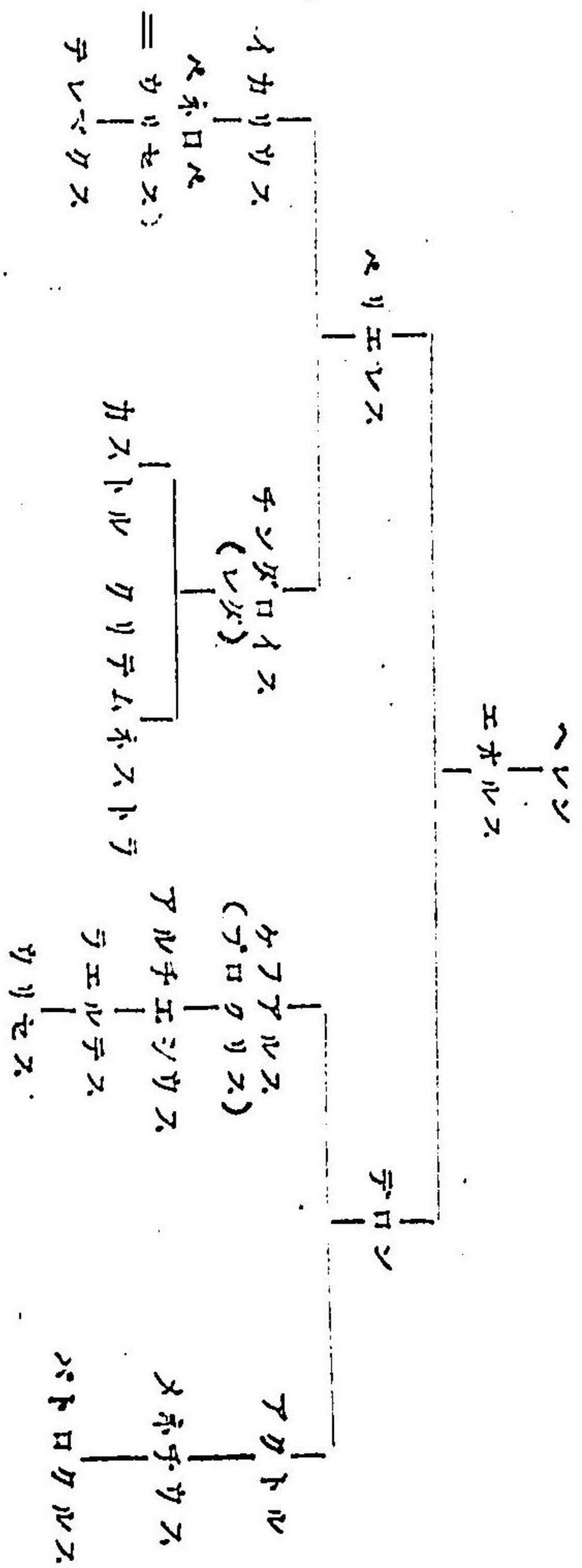
ホープの道德上の論文のうち。

フエネロン、バイロンなどの詩中に散見せる。

* * * * *

(四) 系圖

ウリセス及びベネロメの家系



終

9/37

北歐 神話 霹靂

雪と氷との北歐、半歳の晝と半歳の夜となもてる國、怪奇峻烈なる國民が怪奇壯快なる古傳説はこれ。

赤司囁花 同編
石田春風

金港堂發行

イリアッド 楯の響

一雙の娥眉干戈を動かして、百千の英雄が征矢の音、楯の響、電とび、雷轟く、神いくさ、千古偉大の敘事詩はこれ。

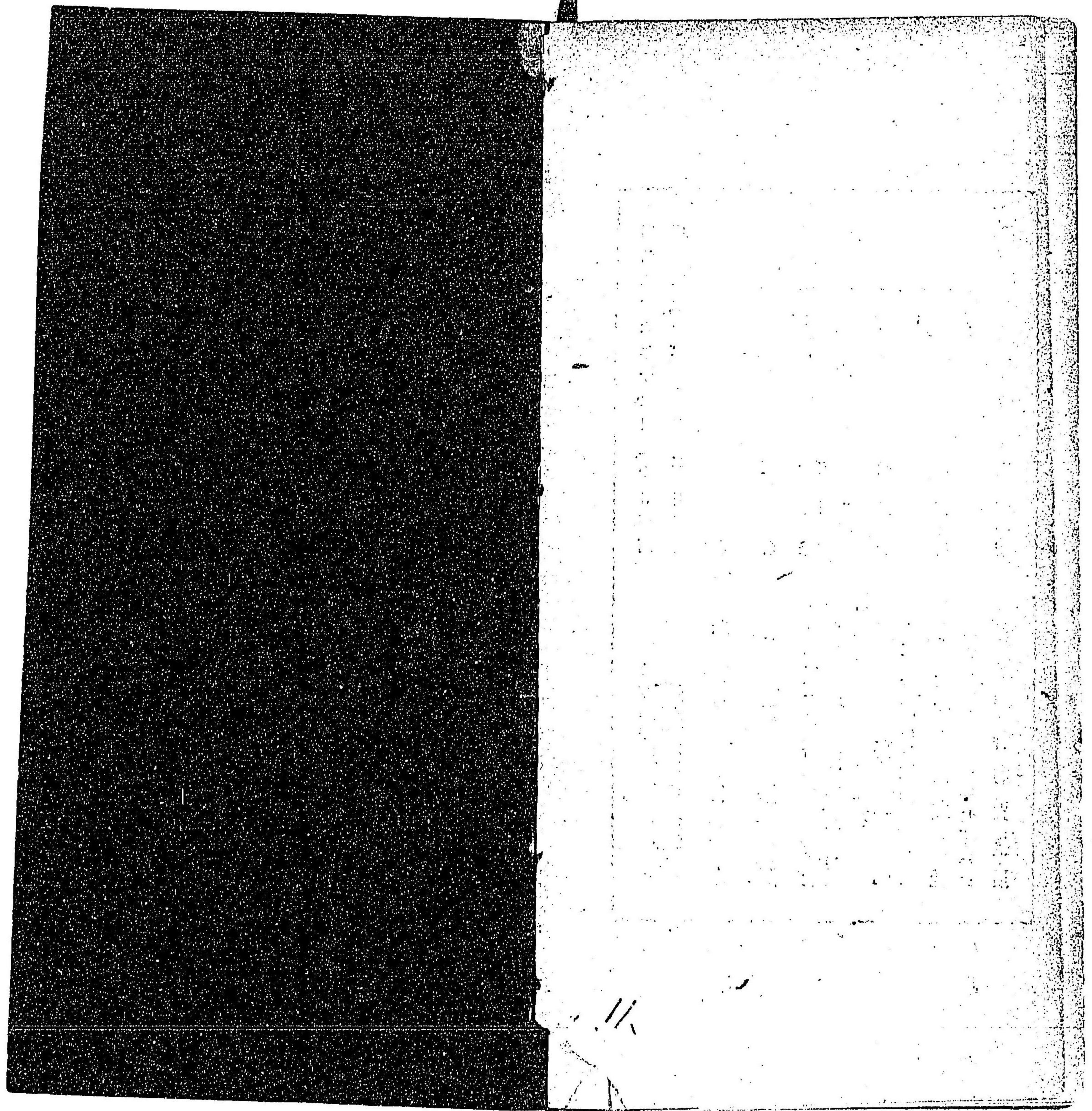
明治三十六年十二月三十日印刷
同 三十七年 一月 二 日發行

さすらひ

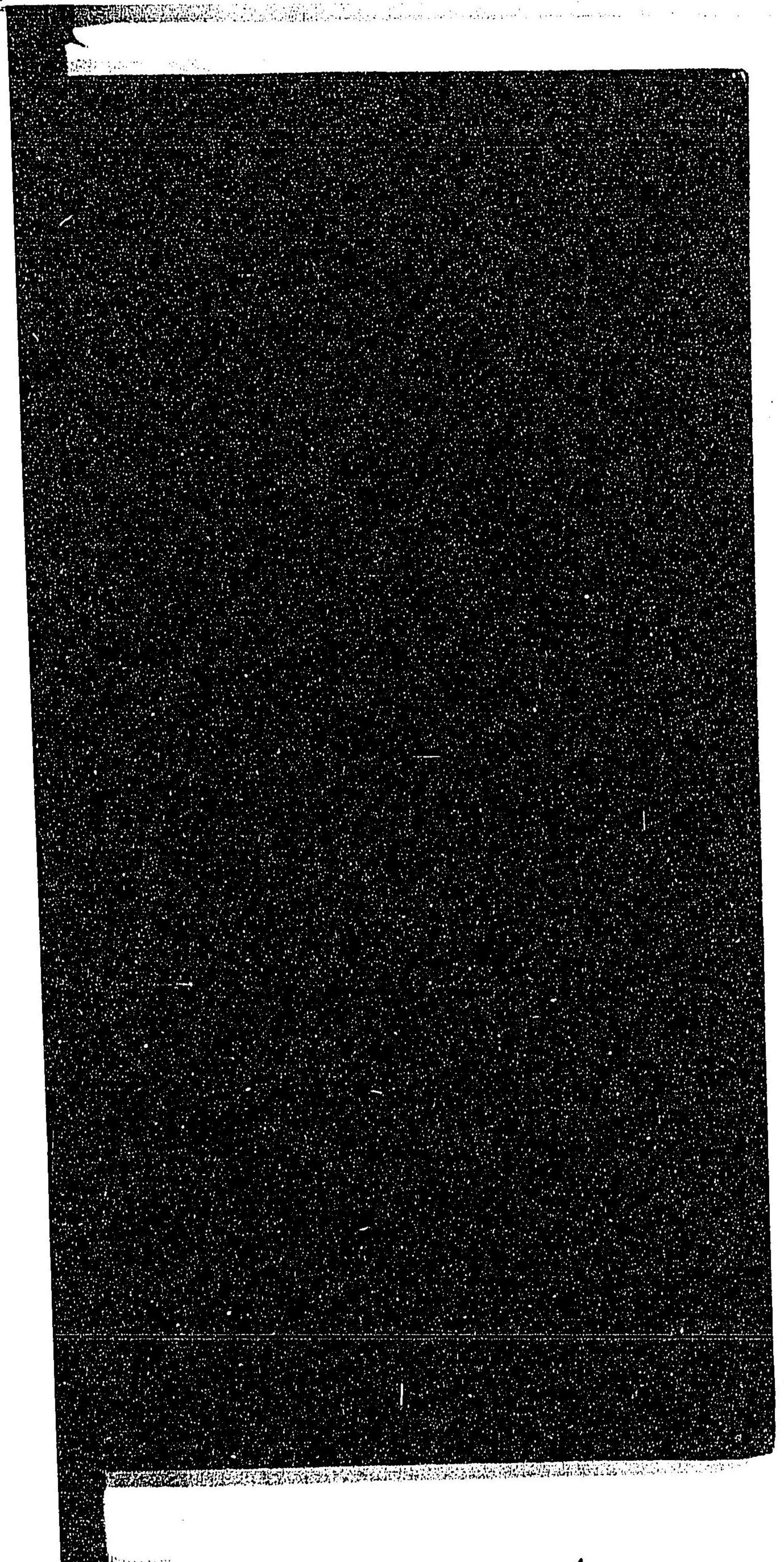
定價金二拾五錢

不許複製

編者	赤司囁花
編者	石田春風
發行兼印刷者	金港堂書籍株式會社 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
代表者	右社長 原亮一郎 東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地
印刷所	帝國印刷株式會社 東京市京橋區築地三丁目十五番地
賣捌所	各府縣特約賣捌所



97
142



97
142

101020-000-2

97-142

さすらひ

赤司 嚳花

石田 春風 / 編

M37

DBY-0302

